

第15回日本体験コンテストin大韓民国

入賞者企画実施報告書

テーマ「日本で実現したい夢」「日本で体験したい事」

① 張^{ジャン} 世鴻^{セホン} (高麗大学校)

テ — マ: 大震災に立ち向かい、
再跳躍を夢見る東北地方の美しさを探そう！
活動内容: 被災地を訪問、観光、東方地方の復旧・復興の姿を発信
主な訪問先: 福島県、宮城県、岩手県、青森県、秋田県、山形県、新潟県

[実施報告 PDF](#)



② 李^イ 鐘元^{ジョンウォン} (光云大学校)

テ — マ: 日本の近代建築を探して。
— 港町の近代建築と偉大な建築士を中心に。
活動内容: 近代建築物、博物館や港町の訪問、見学
主な訪問先: 東京都、大阪府

[実施報告 PDF](#)



③ 梁^{ヤン} 婷綸^{ジョンヨン} (韓国外国語大学大学院)

テ — マ: 食を通して地方と都市を繋ぐ日本
— アンテナショップとB-1 グランプリの巡り
活動内容: 東京のアンテナショップ訪問、B-1 グランプリ参加
主な訪問先: 東京都、神奈川県、千葉県、福岡県、熊本県、

[実施報告 PDF](#)



④ 李^イ 重勲^{シヨンフン} (崇實大学)

テ — マ: 「笑い」の大学、日本: 新しい韓国の笑を探す旅
活動内容: 国立演芸場見学、落語鑑賞、演劇鑑賞
主な訪問先: 東京都、神奈川県

[実施報告 PDF](#)



⑤ 金^{キム} 眞宣^{ジンソン} (淑明女子大学)

テ — マ: 昼伝夜光の旅
— 昼は Tradition! 夜は Illumination! ~
活動内容: 日本文化体験、イルミネーション見学
主な訪問先: 東京都、大阪府、京都府、福岡県

[実施報告 PDF](#)



はじめに

私は高麗大学校で国際学を専攻している。2010年、慶應義塾大学政治学科で1年間交換留学生として留学したのがきっかけとなり、日本に深い関心を持つようになった。大学を卒業し、日本の大学院に進学する予定であったが、2011年3月11日、かつてない大震災が発生し、周りの方々に日本留学を強く反対されていた。私は地震と津波で壊滅的な被害を受けた東北地方を実見し、被災地の実状を確認すると共に震災後の日本を実際に経験することで留学に対する自分自身の不安を振り落としつつ、たくさんの方々にこの地方の美しさを伝えるために今回の旅を企画した。

1) 福島県



(右回りに 1. 福島駅 2. いわき市震災被害者仮設住宅地(会津若松) 3. 会津城 4. 野口英世記念館)

私の旅は、福島から始まった。3月11日に起きた大地震によって、福島は全世界に知れ渡った。福島原発事故など否定的な理由でだ。駅に降り立ち、さらに中心街に入っていくと、道には「がんばろう、東北」と書かれた旗があちこちで靡いているのが見受けられた。旅の出発を告げるため友人にかけた電話で、「福島にいるって？頭おかしいんじゃないの？」と言われたことを考えてみると、地震後の東北地方のイメージが大きく低下したという事実は否定することはできない。私は福島県で有名観光地を巡るのではなく、限られた時間を使って地震による大災害を受け大きな傷を抱えているこの街の雰囲気より深く感じたかった。駅を出て、福島県庁に向かいながら街の雰囲気を味わうことができた。地震発生後、二年が過ぎたこの街は思っていた以上に閑散としていた。

日が落ちる頃、福島県の有名な観光地である会津若松に移動した。郡山で磐越西線に乗り会津若松市に移動する時になって初めて、東北地方の旅が始まったという実感が湧いた。川端康成の「雪国」の始まりのように、浜通り地方から会津地方に向かうトンネルを出ると辺りは一面雪で覆われていた。会津の名物温泉である湯桶温泉に出向き、露天風呂で旅の疲れを洗い流し、気分良く旅行初日の夜を迎えた。東北の有名観光都市である、ここ、会津若松市は新年から放映されるNHKの大河ドラマ“八重の桜”というドラマの撮影地として、再び注目を浴びていた。

朝、早々に宿をでて、最初の日程として会津市内に位置する、いわき市の被災者の仮設住宅を訪問した。

できるだけ写真を近くで撮らないでほしいという付託を受けたため撮影はあまりできなかったが、津波により家を失った被災者たちが、この場所で2年が過ぎた今でも力を合わせ冬を過ごす姿を見ながら、再び自然の偉大さと恐ろしさを感じた。

住民たちが日常生活をしていたため、あちこち周って見学するのは失礼ではないかと考え、会津城へと足取りを移した。会津城は「鶴ヶ城」とも呼ばれ幕末に戊辰戦争など明治維新前後の歴史の舞台となった由緒ある場所だ。最近、ドラマ撮影によって観光客が増えたそうだ。ここはこれまで見たどの城郭よりも壮大で立派なものであった。

それから、会津若松市出身の有名な医師であった野口英世の生家と記念館を訪れ、日本で四番目に大きな湖である猪苗代湖に移動し、白鳥群落地などを見学した。野口英世の痕跡は市内のあちこちで見受けられたが、立派な記念館まで運営されているのを見て、会津の野口英世に対する愛情と尊敬心が感じられた。

とても広く、水平線が見える猪苗代湖。しかし、原発事故の余波で湖から基準値を超える多量のセシウムが検出されたらしい。湖のまわりには魚料理の店が多数あったが、ほとんどのお店が休業状態であった。そのような事実を目の当たりにし、東日本大震災が歴史に残る大災害であったことを再び考え、想念に浸った。

2) 宮城県



(1. 仙台国際空港 2. 名取市の津波被災地 3. 松島の瑞巖寺 4. 仙台市)

宮城県で、一番初めに訪れたのは、名取市だった。ここは、津波で壊滅的な被害を受けた場所であり、私は完全に破壊された仙台空港と海岸地域を訪問した。空港は現在、復旧も終わり正常にその機能を遂行していたが、海辺はいまだに復旧工事に余念がなかった。海岸沿いを歩きながらその光景を見ていると、大自然の前に人間は本当に無力な存在だとあらためて強く感じた。

続いて、宮城の誇りであり、安芸の宮島、天橋立と並び日本三景に選ばれた松島と、松島に位置する有名な寺院である瑞巖寺を訪問した。瑞巖寺は戦国時代、宮城県一带を中心に政権を争っていた豪傑伊達政宗が創建した由緒ある寺院だ。日本でも有名な観光地のひとつである松島は、雪とともに絶景を創り出していた。数多くの島たちときれいな海は、寒い気候の中でも美しい景色を誇っていた。しかしこの場所もまた、地震と津波により多くの被害を受けた。瑞巖寺の別堂は地震の被害により、いまだに補修工事がなされている状態であり、松島の数多くの島たちもまた肉眼で識別できるほどに津波の被害を受けていた。

宮城県の県庁所在地であり、東北地方最大の都市である仙台は大都市としての品格を持っていた。東京や大阪などの都市にも劣らないほど中心街はにぎわっており、仙台の特産品である牛タンに日本の伝統酒である正宗を添え、東北の味を満喫した。

3) 岩手県



(1. 毛越寺 2. 中尊寺 3. 平泉の景色 4. 盛岡市内のあるジャージャー麺のお店)

岩手の代表観光地である平泉は、平安時代に京都に続いて日本で二番目に大きな都市として、日本北部の行政中心地とされており、日本の仏教思想の中心地でもあったそうだ。2011年に世界文化遺産に登録されたこの場所には、平安時代を代表する有名な寺院である中尊寺や、日本文化の真髄を誇る日本式庭園として有名な毛越寺など、たくさん見所がある。しかし、残念ながら暴雪と寒波によりまともに歩くことさえできず、毛越寺の庭園は湖までもが雪に埋もれており見ることができなかった。また中尊寺まで歩いて上っていく道は大量の雪のため地面は凍っており、別途の装備がなかった私はかなりの苦勞を強いられた。強風も大変だったが、それでも雪に覆われた平泉は絶景を誇っていた。中尊寺は日本の仏教の浄土思想の中心の役割をしていた寺院であっただけあり、その規模と美しさは他の寺院と比較することができなかった。仏教と日本の自然崇拝(信徒)が融合された寺院や庭園などの美しさに魅了された。平泉には源義経の忠僕、武蔵坊弁慶の墓があることでも有名である。

岩手県の県庁所在地である盛岡市は麺で有名な都市だ。植民地時代にピョンヤンから日本を訪れ盛岡に住んでいた朝鮮人たちから伝わり有名になった盛岡冷麺や坦々麺、ジャージャー麺など、盛岡ではたくさんの種類の麺料理を味わうことができる。岩手は北海道を除いて日本で一番面積が大きい県だ。しかし、面積が広いだけでなく、見所や名産品も豊富なところだ。

4) 青森県



(1. 蕪島 2. リンゴの競売・共同売場 3. 弘前城 4. ねぶたの家、ワ・ラッセ)

八戸は心をスッキリさせてくれる美しい海を見せてくれると共に、自分の体を支えることができないくらいの強風と皮膚が切れてしまうかと思うような雪と寒さを経験させてくれた場所だ。クワカモメの故郷とも呼ばれる八戸だけに、到着と同時に青森県立公園である蕪島に向かった。天然記念物であるクワカモメの繁殖地である、ここ、蕪島は種差海岸と共に美しい海で有名である。海岸沿いで雪と突風により舞い上がる砂に当たりながら、カメラを握りしめ必死に写真を撮った記憶が思い出として残っている。その後、水産市場を訪問し、港街特有の濃い海のおいしさと情緒を感じることが出来た。

続いて、日本第一のリンゴの名産地である弘前に到着した。明け方から訪問したリンゴの競売・共同売場は規模も大きくすごい熱気であった。真冬でも冷凍保存倉庫に保管された相当量のリンゴを毎日全国各地に出荷するんだそうだ。桜で有名である弘前城もこの市自慢の観光地だ。しかし会津の鶴ヶ城を見てきた私としては本堂の建物以外は何も残っていない弘前城は少し寂しい感じがした。それでも雪の積もった桜木と静かに建っている弘前城が創り出す幻想的な風景を見ながら桜の満開が美しい弘前城を想像してみることができた。

青森は美しい港町として有名だ。青森の象徴であるアスパム(ASPM)にやっとのことで到着し展望台に登ったが、降りかかるような吹雪による天候不良で景色を楽しむことができなかった。雪が被さったベイブリッジはそれでも趣があったがとても残念だった。アスパム周辺にエーファクトリー(A-Factory)がある。ここは青森の特産品が売っているところであるが、主にリンゴと関連したネックレスと記念品が多かった。続いて訪れたのは、'ねぶたの家 ワ・ラッセ'という、青森の代表的な祭りであるねぶたを主題とした一種の体験館だ。ねぶたは鬼の形相をした造形物を使用する祭りである。祭りに使用される大型造形物たちを見るとかっこいいのはもちろんのこと、伝統を守ろうとする情熱と努力が感じられ本当に感銘を受けた。青森市内は思ったよりも見どころの多いところだったが、雪のため思うように観光できなかったのが残念だった。

続いて、世界自然遺産に登録されている白神山地に移動した。やはり雪のため冬は登山口は全部閉鎖されていた。仕方なく白神山地案内映像館と展示館を回りながら、満足するしかなかった。残念に思いながら近くにある白神神社にも行ってきた。雪に覆われた白神神社は本当に壮観であった。そして新年はじめてのおみくじをひき大吉が出たとき、旅の疲れは一気に吹き飛び喜びに変わった。

5) 秋田県



(1. 秋田の切りたんぽ 2. 角館の石黒家 3. 田沢湖とたつこ像 4. 男鹿半島の温泉)

秋田美人で有名な秋田県。秋田の名物であるきりたんぽに日本酒を添え、東北地方の豊かな食材に再び感嘆した。秋田では東北の京都と呼ばれる角館と田沢湖、そして男鹿半島を訪問した。

角館は 17 世紀に造成された侍村だ。200 年以上経った数十余軒の侍邸宅が保存されているところだ。この日、相変わらずの暴雪と強風に歩くことさえままならなかった。強風と雪を避けて入ったところは石黒邸宅だった。角館の数十軒の邸宅の中でも最も古いものであり、身分の高い武士の家だったそう。この土地のたくさんの侍邸宅には現在もその子孫たちが以前のままでの生活様式を維持しながら住んでおりとても美しい村だ。

韓国の有名なドラマで、日本でも放送された「アイリス」の撮影地で有名な田沢湖は、日本では水深が最も深い湖であり最大水深がなんと 423M に達する。水深がとても深いので厳寒の中でも凍ることがないと言われており、直接訪問してみると、やはり身を切るような寒さの中でも凍ることなく穏やかにその深さをおおい隠していた。寒さの中強固にぽつんと立っている田沢湖の象徴、たつこ像を見ているとかわいそうな気持ちになった。所要時間 1 時間ほどの田沢湖一周バスに乗り、湖を観光したのだが、天候不良のため観光客が一人も居なく 1 時間たった一人でバスをタクシーのように乗るという変わった経験もした。

その後、温泉で有名な秋田の男鹿半島で温泉を楽しみ、旅は終盤を迎えた。有終の美を飾るため再び心を整え、体を休め疲労をとった。

6) 山形県と新潟県



(1. 山形市 2 さくらんぼの山形銀行 3. 白山神社 4. 朱鷺メッセ)

山形県はこじんまりした都市だった。仙台をのぞいて、東北地方は各県の県庁所在地といっても大都市の雰囲気はあまり感じられなかった。人口が少ないせいもあるけれど、日本で最も後れた地域として有名であり、またソウルと東京に慣れている私には田舎とまで感じられた。山形はさくらんぼが有名で、神戸とともに和牛の名産地である。山形の牛肉は山形牛と呼ばれ、その品質は全国的に知られているそう。直接味わってみた結果、山形牛の味はやはり最高だった。山形ではどこへ行ってもさくらんぼを形象化した造形物や写真、キャラクター商品などが見受けられた。山形銀行がさくらんぼの模様をとって代表イメージに使用しているのを見て、山形県民のあふれるさくらんぼ愛を感じた。

この旅の終点であり「国境の長いトンネルを抜けるとそこは雪国であった」から始まる有名小説「雪国」の背景になった新潟に到着した。新潟の代表的な神社といえる白山神社に行くところから新潟の日程が始まった。ちょうど神社を訪問した日が日本の大学入試であるセンター試験日だったため、参拝をしようとする人々でごった返していた。韓国のセンター試験日の有名寺院の風景と似ていると感じた。この場所もやはり由緒ある神社であり、神社内には400年以上前に建立された建物もあった。

新潟は人口が80万を超える大都市だ。東京の東京タワーやスカイツリー、ソウルのNソウルタワーや63ビルディングと同じようにここ新潟を代表するランドマークがまさに朱鷺メッセだ。この日はちょうどコンサートのため入場が制限され、朱鷺メッセのなかに入ることすら困難であった。そのため内部施設の観覧はもちろん博物館にも入ることができず、残念だったがそれでも新潟の美味しい物を食べ、美しい海を見て、温泉を楽しみ、お土産を買って長かった旅の終点を迎えた。

旅を終えて

天涯孤独の身で列車に乗り旅立った2週間の東北旅行は私にとって忘れられない思い出となった。実際のところ、東北地方は観光地としてよく知れ渡っているわけではない。その上、2011年3月11日に発生した東日本大地震の影響により、韓国人にとって東北はその魅力を伝える前に、行きたい旅行地と言うよりは危険な場所として認識されている。しかし、私が経験した東北地方は世界のどこにも劣らない美しい場所であった。大災

害の惨事の中で、復旧・復興に励み、遠退いてしまった観光客をまた誘致するために多くの努力をしている東北のため、私が自らの目で見て経験した東北地方の美しい姿をたくさんの方々に伝えたいと思う。そして、人々が震災後に持っている日本に対する漠然たる不安感を払拭させることができるように少しでも手助けすることで東北の復興に微力だが役立ちたいと考えている。

日本の近代建築を探して。

近代建築の導入と現在。

東京の玄関口と言われている、丸の内の中心部に赤い煉瓦で建てられた東京駅。これは、東京を象徴する一つのシンボルとしても有名だ。古めかしくて重々しいこの建物は、去年 10 月に太平洋戦争の当時、空襲で失われた 3 階とドームの屋根を復元する工事が終わり、一般に公開された。100 年前の創建当時の姿に復元されたということで多くの人々が集まり、観光客などで賑やかだ。駅舎を観覧する人々は、建物を通じて色々な事実と向かい合うことが出来る。100 年前の建築がどのような形であったのか、今とはどのように違うか、などに見比べることが出来る。ここで建築遺産の長所ともいえるのが、建築遺産はほかの文化遺産と違って、建築当時の姿をそのまま維持していること。建物の配置や用途、内外に施されている装飾などを詳しく見ることができる。それにより、当時の人々の生活が具体的な形で推理され、思っている以上の発見がある。



長い人類の歴史の中で、色々な建築遺産があるが、私はその中で近代建築に興味を持っている。以前から近・現代史に興味があり、特定の時期を定め、関連の遺跡を調査したり、資料を探していたりした。特に近代、東アジアでは急激な社会の変化が起きた時期であり、この時期に建てられた建物は、短期間にもかかわらず、社会変化の様相をそのまま保っている。その中でも、この時期の日本は近代化に伴って、多くの建物が建てられ、今も保存されている。私は、その点に着目して日本体験コンテストを通じ、近代建築を調べながら建設当時の歴史や物語を学ぶ旅行を企画して体験した。

●神戸で知った日本の近代建築の導入過程

今回、初めて神戸を訪れた。神戸は「日米修好通商条約」が結ばれて以降、横浜・長崎・函館・新潟とともに開港した開港地であり、当時は外国との交流の中心地であった。開港当時の神戸は現在のように設備が整っていなかったため、貿易のために来航する船の接岸施設や船員の生活に必要な基本的インフラの設備の構築が必要だった。外国人は開港地の周辺に土地を設け、外国人向けの町を作りだした。これが居留地の始まりである。

神戸市立博物館で居留地が作られる過程を調べることが出来た。居留地はイギリス人土木技師の J.W ハートが設計を担当し、ヨーロッパの近代都市計画技術に基づき建設された。博物館に展示されている彼の設計図を見ると、建物や下水道はもちろん、公園や街灯の設置まで細かく記録しているのが確認できる。彼が立案した配置はそのまま建設に反映され、今も当時のままである。博物館の近くには旧居留地 15 番館（旧アメリカ領事館）があり、当時建てられた下水道の一部が保存されている。この下水道は煉瓦だけで作られた日本最初の近代下水道だそう。

異人館で有名な北野町でも、多様な様式の建物が建てられた。他の開港地が港湾の近くに居留地を作ったのに対し、神戸は港湾から離れているところにも各国の大使館や商人の住宅などが建設された。これは、港湾付近の居留地の建設が遅くなったため、定められた居留地以外にも外国人の居留が認められた。そのため、今も北野町では各国の様式に建てられた建物と日本の和式住宅が混在している。一見すると、アンバランスな景色にも見えそうではあるが、実際に町を歩いてまわると、意外にも景観に溶け込んでおり、自然なかたちで、日本人に近代建築が馴染んでいったのが感じ取れた。



●日本人 1 世代建築を代表する辰野金吾と彼の作品

明治維新以降、日本政府は先進国の学問、芸術、技術、制度を受け入れるため、J.コンドルというイギリス人建築家を招く。1877 年に来日した彼は、東京大学工学部の前身である工部大学の教授になり、1882 年には日本で最初の博物館を建てるなど、多くの近代建築の設計を担当した。東京にある岩崎邸宅庭園西洋館も彼の作品である。当時、近代化推進に積極的であった日本政府は公共施設を中心に、日本全国に近代式建築を建設し始める。最初はイギリスやドイツなどから来た建築家が設計を担当したが、外国人の建築家を雇うにも限界があったため、近代建築を専門的に設計、建設することができる日本人建築家の必要性が浮かび上がった。それにより、殖産興業を担当していた工部省の下で土木、建築の専門家を養成する工部寮を設け、これを 1873 年に大学に切り替えた。コンドルは工部大学（現東京大学工学部）の教授になり、近代建築ができる日本人建築家を養成した。

コンドルの弟子として勉強した人は「片山東熊」や「辰野金吾」が挙げられる。日本での近代建築の中で特に影響を及ぼしたのが、辰野金吾である。辰野は、工部大学の造家学科一期生としてロンドンで 3 年間留学し、帰国後にはコンドルの後任として 18 年間教授として働いた。彼は 200 件以上の近代建築の設計を担当し、日本建築学会の創設に主導的役割を果たした。彼の設計には特徴がある。赤い煉瓦の表面に白い石を貼り、屋根を塔やドーム型で建設すること。これがいわゆる「辰野式」と呼ばれる建築様式である。素人が見ても、辰野の建築物は独特で、他の建築士の建築物との違いは一目瞭然である。今回の旅行では、様々な建築物を見ることで「辰野式」建築様式を発見できたり、その形成過程を調べる事が出来た。

彼の名前を世に知らせた作品は日本銀行本店である。ニュースを見ると、金融・通貨政策に関連する報道でよく映される建物である。この建物はルネサンス様式を加味したネオバロック様式で建てられたもので、地下 1 階・地上 3 階の石積み煉瓦造りで 1896 年に建てられた。当時の本店の様子を描いた「日本銀行落城之図」が本店の回廊に展示されているが、銀行が位置している日本橋付近で当時もっとも大きい建物のように、厳かで重々しい雰囲気が感じられる。

本店に入ると、まず旧営業場が見られる。旧営業場は銀行のほとんどの業務が行われたところで、3 階までの吹き抜けの天井が特徴的だ。本来、営業場の天井を今より高く設計する予定であったが、1891 年に発生した

濃尾地震をきっかけに地震に備える必要性が浮かび上がり、耐震性を強化した設計に変更され、今の姿になったという。こうした設計が的確であった為か、関東大震災や2年前の東日本大震災の時は、ほとんど被害を受けなかったそうだ。2階の中央にはドームで形成された空間があり、ドアを閉めると八角形の部屋になる。この八角形のドームは辰野がこだわる部分で、彼が設計した建物のほとんどに適用されている。ここは新館が建てられるまで、金融政策決定会合などの会議室や接見室として使われたという。



明治時代の大蔵大臣として有名な、高橋是清もこのときに、日本銀行本店で建築の仕事をしていた。本店の建設にあたっては、辰野と高橋との間にエピソードがある。当時高橋は、辰野の下で仕事をしていました。高橋は本店の建設に必要な鉄鋼資材の在庫管理を改善するとともに、石工の親方衆相手に信賞必罰の競争原理を導入し、労働生産性をあげた。賃金難に陥っていた辰野にとって大いに助けになった。さらに、中央銀行の権威と風格を考慮して、建築すべてを石造りにしようとした当時の日本銀行側と、構造力学的の問題でこれを反対していた辰野と対立していた時、高橋は、内部は煉瓦で造り、表面は石板を貼って、接合部を上手に処理し、御影の石造りと見えるように仕上げるという折衷案を経て日本銀行本店が完成する。政府発注の建物を日本人建築家が設計し、完成した初めてのケースであり、辰野は世間にその実力が認められ、政府や企業からたくさんの設計の依頼を受けることとなる。

「辰野式」がその特徴を見せ始めたのは、旧日本銀行京都支店の設計を担当することからと見られる。東京と大阪にある日本銀行の建物とは違って、京都支店は赤い煉瓦造りで花崗岩を貼って装飾するとともに左右対称で、両端には塔を建てた。この様式は19世紀後半イギリスで流行っていた建築様式で、辰野がロンドンに留学していた時に好きだった様式だそうだ。中に入ると、本店の営業場と同じく、天井まで吹き抜けになっている広い営業場がある。屋根や壁には採光のため、色々なサイズの窓がたくさん作られていて、昼は電気をつけなくても十分に明るく感じるようにした。この建物の建築のため、辰野は日本産の建築材料を使うことに努力したといわれている。例えば、煉瓦は大阪の会社から、屋根のスレートは宮城から、大理石は岐阜県大垣で生産された製品を使うなど、多くの建築材料に日本製が使われた。日本の材料技術が、その時点で、ある段階まで上がったと考えられる。

彼の建築様式が確立したのは東京の中央駅舎の建設当時である。今も多くの人々が利用している東京駅である。

東京駅舎は彼の晩年の作品で、赤い煉瓦や白い石が装飾されている雄大な建物である。新橋～横浜間の鉄道開業以降、日本各地に鉄道が敷かれ、鉄道の輸送量は急激に増えていた。これで東京の中央駅の必要性が浮かび上がり、1889年東京府によって公表された東京市区改正設計によって、丸の内付近に中央駅を建設することが決まった。最初はドイツ人鉄道技師によって進められていたが、1903年に日本建築学会の第一人者になった辰野がこれを引き受けることとなる。6年間の工事の末、1914年に完成した建物は煉瓦造りで、装飾用に赤い煉瓦を貼って建てられた。当時は鉄筋コンクリート様式が流行っていたが、辰野はあくまで煉瓦にこだわっていたという。

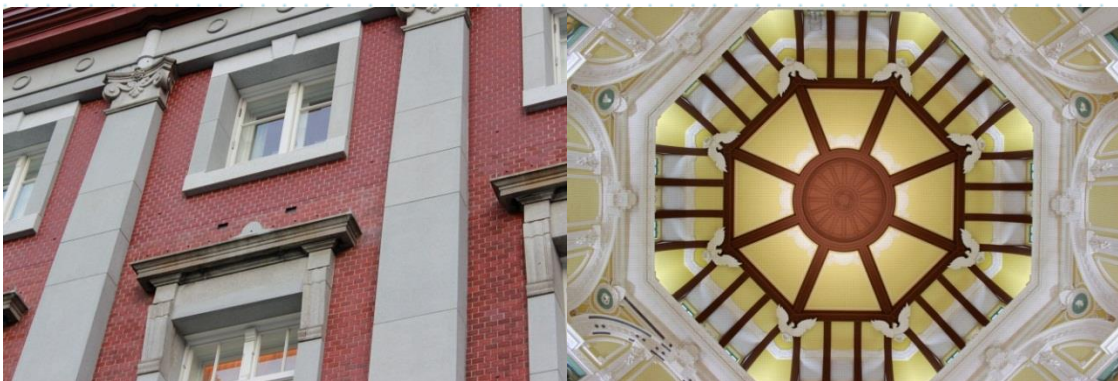
この装飾用煉瓦を貼るにも特徴がある。まず、「ふくりん目地」方式という技法を使い、煉瓦の間にコンクリートを巧妙に入れ半輪型にする。そして、「かえるまた」という形でコンクリートが交差する部分を自然につなげ、全体的にひとつの線で繋がっているようにした。こうした方式は日本の城を建設する時に使われたものを応用している。

駅舎を外から見てみると、南北対称のドーム型の出入り口が見える。現在はどこでも自由に出入りすることができるが、初期には南口は入り口、北口は出口として指定されていたという。中央には天皇や貴族のための専用で入り口を設置し列車を待ちながらゆっくり休める部屋やテラスが作られている。南北の出入り口と中央部の間には閉められているアーチ型の門があるが、これは当時、貨物専用の出入り口として使われていたようだ。

壁や底には白い石で加工した大きな石が見える。一見、花崗岩を加工したように見えるが、実はひとつの岩石で作ったものではない。「石もどき」という方法で、大量の小石をセメントに混ぜたものを加工しているのである。この方式は必要な形を自由に作ることが出来るとともに、セメントと混ぜられている小石がきらきら輝くので花崗岩を使ったような効果がある。これにより、費用を抑えると同時に大きい石を細工するのに必要な時間を省略することで、工期の短縮も可能となった。

ドームの屋根を見てみると八角形の天井が目立つ。ドーム3・4階には干支や2メートルを超える鷲のレリーフが彫刻されている。天井は八角形なので干支のレリーフは全部で8つ。残る4支はどこにも彫られていない。実は干支は単なる飾りではなく、方角を示しているもので、彫刻されていない干支は、卯・酉・午・子であり、これは、東・西・南・北を示している。干支は順番に方角を示しているので、省かれているものを見つけて今の方角を知ることができる仕組みである。

東京駅の完成によって辰野は名実ともに日本建築の最高の地位に立つこととなった。案内して頂いた方によると、辰野の夢は国立銀行（中央銀行）、東京の中央駅、国会議事堂を設計することだったという。国会議事堂の設計依頼が入り、彼の夢は叶えられたかに見えたが、彼の死によって実現されることは出来なかった。もし、彼が国会議事堂を設計することが出来ていたとしたら、永田町には今の国会議事堂とは全く違う建物が建てられていたかもしれない。



●近代建築の保存と活用

ひとつの世代を風靡した近代建築も歳月を経て老朽化が進む。多くの建物は、地震などの災害や戦争中に喪失

した。また、戦後の経済発展により建物の需要が増加し、土地の再開発が加速化することになり、残る近代建築物の数がどんどん減っていった。建物の高層化、密集化が進む中、活用性が低い近代建築は姿を消していった。しかし、長い間、地域とともに存在してきた建物の歴史的な価値を無視し、効率だけのために撤去することが妥当なのか、という学界や地域社会の要求も激しくなり、建物の存続問題は大きな争点となった。

当時、この問題が、いかに難しかったのかを示す建物がある。京都にある京都郵便局（現中央郵便局）である。この建物は1902年、赤い煉瓦様式で建てられたもので、三条のランドマークであった。1970年に郵政省（民営化後の日本郵便会社）はこの建物の老朽化を理由に挙げ、改築を決定した。しかし、明治時代の近代建築様式を守るべきだとして、日本建築学会が意見を示す一方、当時の遺産を壊さずに、守るべきだと地域住民の要望が殺到した。これにより、保存と改築について論議が始まったが、両者の立場は平行線をたどり、長引いた。2年間の論議の末、外壁をそのまま保存する形で、内部を改築する外壁保存という案で合意に至った。日本で、初めて行われた外壁保存の事例である。この論議は近代建物の保存がいかに難しいものなのかを示している。

保存が決まった後も問題は残っている。建物をどのように活用するのか、ということである。単純に保存が決まってもそのまま放置することもできないし、維持や補修にはお金もかかる。最近になって近代建築の活用方法についての議論や所有者・地域社会の動きが目立つ。大阪公会堂や旧日本銀行京都支店では行事の賃貸や展示空間として活用している。地方によっては都市の内外にある近代建築を観光資源とし、観光客を集めて地域の活性化を図っている。

事例として門司が挙げられる。門司は以前、九州の関門都市で中国や欧州と本州を結ぶ中継地として繁栄した町である。特に、筑穂炭鉱の開発とともに重工業の投資が増え、工場が建てられたり、海運会社が支店を設けるなど、九州の中心都市となった。しかし、戦後に回路が断絶し、石炭の消費がさがり、筑穂炭鉱が廃校することとなり70年代から門司是最悪の危機に陥ることとなる。地域活性化のため、門司が考えたのは、残っている近代遺産を整備し、レトロ風な町として観光客にアピールすることだった。このため、個別に建物のストーリーを与え、それを調べることで建物の特徴はもちろん、門司の歴史や当時の人々の生活を紹介する場として活用した。例えば、旧三井倶楽部は1911年門司を訪問したアインシュタイン博士の来日をりようして、博士が泊まっていたときに、使用したペンや家具などを展示し、博士の来日時のエピソードなどを紹介している。それ以外も盛んでいた時代を象徴するネオルネッサンス風の旧門司税関や門司電気通信レトロ館なども整備の後、公開された。こうして、個別の個性を持つ門司港のレトロな町が誕生し、観光地として有名となった。住民たちもボランティア活動を通じて周辺の案内や行事などを行い、広報に熱心である。

日本での近代建築は変化や発展の象徴であり、当時を生きていた人々の物語を語っている。12日間、短いと感じた時間の中、私はその物語を知り、近代建築の新たな魅力を感じる事が出来た。でも、それはごく僅かな部分を知っただけで、まだ日本のあちこちには独特な魅力や物語を持つ近代建物がたくさん残っている。もし、あなたがいるところに近代建物が建てていれば、一度、建物が語る物語に耳を傾けてほしい。当時の人が何を考え、どのように生きてきたのかを感じることができるはずだ。未熟なものだが、私の体験がこの文を読んでいる人々にとって近代建築に関心をもたらせるきっかけになることを願う。

◆ 日本体験実施報告書

- ▶ 企画タイトル：食を通して地方と都市を繋ぐ日本ーアンテナショップと B-1 グランプリ巡り
- ▶ 所属：韓国外国語大学大学院
- ▶ 名前：梁婷絢(ヤン ジョンヒョン)

「食による地域活性化」というテーマで、2012 年 10 月 17 日～21 日の約 5 日間で九州地域を回り、11 月 8 日～18 日の約 10 日間で東京周辺を旅行した。はじめに、このテーマについて感心を持つようになったのは、学部生時代に交換留学生として、日本に滞在した経験からである。交換留学中に、大学卒業後は「地方の田舎に帰って就職したい」と考える多くの同世代の若者に出会った。韓国では地方よりソウルで働き、生活したいと考える若者が一般的である事と比較すると、「田舎で就職したい」と言う日本の若者の考え方は私にとって、非常に斬新であった。

日本の若者が卒業後に田舎に帰りたいと自信を持って言える事は、若者たちが活躍できる環境が地方でもしっかりと整っているからではないかと考えるようになってから日本の地域活性化の為の対策と努力について関心を持つようになった。その後、「アンテナショップ」と「B-1 グランプリ」と言う「食による地域を活性化」対策を知り、機会があれば、この活動についてもっと詳しく調べてみたいと思った。「食による日本の地域活性化」対策を学ぶ事により、人的資源や物的資源がソウルに集中することにより、地方経済が悪化して行く韓国の「地方経済活性化」対策を見出す事が出来るかもしれないと思ったからである。そのような中で「日本体験コンテスト in 大韓民国」を通して、私の夢を実現出来る機会を得る事が出来た。

1. アンテナショップと B-1 グランプリ

今回の体験はアンテナショップと B-1 グランプリを軸とし、その他の日本の地域活性化の為の活動を調べる事が主な内容であった。アンテナショップとは、地方自治団体の特産物を首都圏在住者に紹介する事を主な目的とし、東京周辺に設置された店舗を指す。アンテナショップには特産物の販売所やギャラリー、観光案内コーナーなどが設置されている。この施設を通して、地方自治団体は首都圏在住者に地方の特産品や観光の情報、地域の特色を広め、また、地域の特産品の販売や観光地の広報などの成果を得ている。

B-1 グランプリとは B 級グルメを活用した地域活性化活動の日本一を競うイベントで、商業的な目的よりは地域の公益の為のイベントであると言える。2006 年から開催された B-1 グランプリは毎年開催地を決め、日本の各地で開かれており、2012 年には 10 月 20 日～21 日の二日間北九州で開催された。

2. 多様な商品開発による地域活性化

今回の体験期間中、日本の自治体のアンテナショップを回ってみて、アンテナショップは各地域の商品開発のための努力が支えている事が分かった。各自治体のアンテナショップを訪問すると、その地域の魅力や特産物をすぐに知る事が出来た。これはアンテナショップが単純に商品を販売しているだけではなく、その地域の特色や特徴に合う特産物を開発し、消費者にPR活動をしているからである。

特に記憶に残ったアンテナショップは山梨県と鳥取県のアンテナショップである。山梨県のアンテナショップの場合、ぶどうなどの果物の生産が多いと言う山梨県の特色に併せて、ワイン製品の販売や広報に力を入れている事に気がついた。また、果物を活用して開発した様々な商品が陣列されており、この商品を通して山梨県をイメージする事が出来た。鳥取県の場合、鳥取県出身の著名な漫画家の作品を活かした多様な商品を販売していた。日本では自然環境だけではなく、地域の様々な特徴が反映されている新しい商品の開発に力を入れている事が分かった。また、この商品の広報のための努力と工夫が支えているからこそアンテナショップが地域活性化に繋がっている事が分かった。



3. 日常化による地域活性化

アンテナショップが地域活性化に役立っているもう一つの理由は、アンテナショップが日常生活と密接なお店であるからである。「食による地域活性化」というテーマで今回の体験計画を立てながら、私は当初アンテナショップに対して特別な店と言うイメージを持っていた。しかし、様々なアンテナショップを訪問していく内に、日本人にとってアンテナショップは特別な店ではなく、大変身近に感じられる店である事が分かった。東京駅周辺や日本橋駅、新橋駅周辺のアンテナショップでは主婦や子供、スーツを着たサラリーマンなど多様な人々がアンテナショップを訪問し、買い物している姿を見かける事ができた。また、多くのアンテナショップがイトインコーナーを設置しており、地域の食べ物を味わう事ができて、気軽に訪れやすいお店作りであった。

アンテナショップの中で、特に印象に残ったのは徳島県のアンテナショップである。徳島県のアンテナショップは日本の大手コンビニである「ローソン」のお店の中に設けられていた。日本人が日常的に通うコンビニにまでアンテナショップが進出していると言う事は、アンテナショップが日常生活と密接なお店である代表的な例だと言える。徳島県のアンテナショップを見て、これから日本のアンテナショップがより一層、多様な進化を遂げるであろうと言う期待を抱いた。



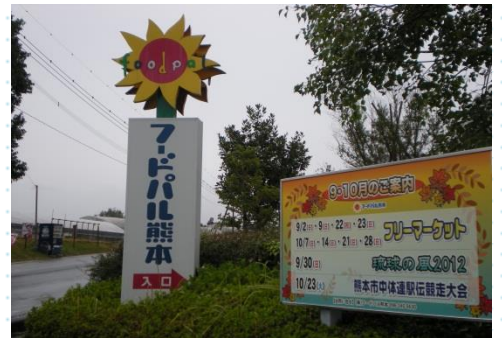
4. キャラクターによる地域活性化

B-1 グランプリとアンテナショップ、そしてこれに関する地域を巡りながら、日本では各地域を代表するマスコットキャラクターを利用した地域活性化に力を入れている事を知った。B-1 グランプリに参加した多くの団体は各地域の料理や地域を宣伝する為にマスコットキャラクターを活用していた。特に今回訪問した熊本県の「クマモン」が代表的な成功例だと言える。熊本県の発表によると、2011 年の 1 年間で衣類などクマモン関連グッズ約 2 千種類の販売総額は約 25 億円にのぼったと言う。実際クマモンキャラクターを取り扱っているお店も売り上げに大いにプラス効果があったと答え、キャラクターの影響力の大きさが分かる。また、熊本県では、県内の企業が無料でクマモンのキャラクター使用できるようにし、地域活性化に役立てている。



5. 関連産業の連携による地域活性化

今回の体験を通して、日本の各地域を訪れ、日本では地域の関連産業の連携により、地域の活性化が行われている事が分かった。熊本県で訪問した「Foodpal 熊本」もその一つである。Foodpal 熊本は地域の食品会社が集まって作った団地で、工場の見学や製作体験が可能な施設やレストランなどの様々なお店が集まっており、「食をテーマとしたテーマパーク」とも言える。綺麗な庭に沿って、ワイン工場、パン工場、市場などを自由に回って、体験コーナーなどの工夫もある魅力的な場所である。Foodpal 熊本は同業種の工場やお店が集まり、連携する事で、売り上げ増加、知名度の向上などの効果を得ている。



アンテナショップでは大学と地方自治体が連携するケースも見られた。神奈川県の大和市は明治大学の商学部の学生達と連携し、東京でアンテナショップを設けていた。大和市はアンテナショップを通じて首都圏在住者に対し、地域の行事や特産物を発信し、一方、明治大学の学生達は講義で学んだ事を現場で実践する事ができる。つまり、地方自治体と大学が手を組む事によるシナジー効果を得ている。

今年 B-1 グランプリに出品した三崎市の場合、市内のマグロラーメン屋さんと水族館が連携し、地域を PR する商品を提供していて印象的であった。水族館では入場券だけではなく、市内のマグロラーメン屋さんでマグロラーメンを味わう事ができるチケットを販売している。水族館を訪問した観光客にマグロラーメンを味わう機会を提供する事によって、観光客に地域の特産物を知らせるきっかけに繋がっている。

何よりも B-1 グランプリが連携による地域活性化の体的な例だと言える。B-1 グランプリに参加する各団体は、各地域で同種業種に従事する人々で構成され、地域活性化の為に努力している。B-1 グランプリの期間中、各団体の構成員が地域を広報するために努力する姿は印象的であった。B-1 グランプリの成功の秘訣は出店関係者一人一人の郷土愛と地域の連携によるものであると実感した。



6. 日本体験を終えて

今回の日本体験で、日本の地域活性化の為に努力を直接経験する事ができた。韓国でも、より積極的に地域活性化対策に挑む必要があるのではないかと痛感した。今回の機会を通して学んだ事、また感じた事を活かして、これから韓国の地域活性化に役立てたいと考えている。



今回の日本への旅は、日本の笑いを直接体験するための旅でした。10本の舞台を見て、その中から笑いの要素を見つけてみました。10本の舞台の感想について順序を追って報告しようと思います。

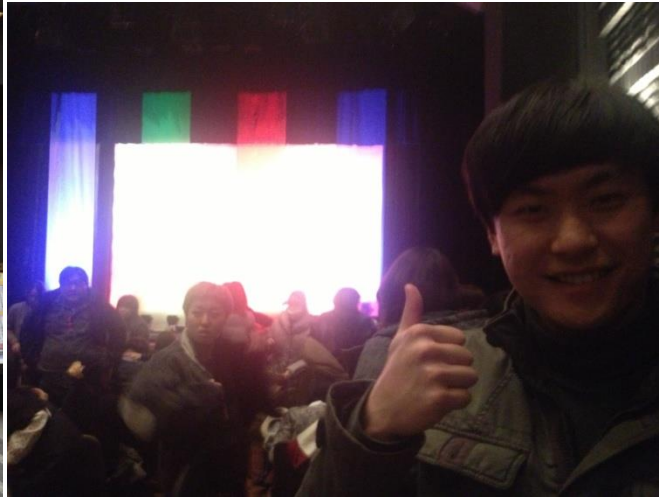
まず、はじめは国立演芸場での落語会でした。伝統的な寄席の落語とほとんど変わらないこの落語会は、国家によって運営される寄席の落語とも言えるでしょう。丸ノ内線赤坂見附駅から徒歩で近い国立演芸場のチケットの値段は3000～3500円ほどで、東京の代表的な寄席、浅草演芸ホールの入場料より少し高めでした。ちなみに寄席の入場料は普通2000～2500円くらいです。上演内容は他の寄席における公演と大きく変わることはない江戸落語でした。しかし、庶民の娯楽というイメージの落語とは異なり、施設や舞台の雰囲気からより上品でしゃれた姿を見ることが出来ました。例えば、場内で飲食を禁止されていて(寄席は可能)、観客も舞台に対する礼儀をわきまえていました。落語自体のレベルは高かったが、本場の江戸落語を体験してみたいなら新宿や浅草の寄席がいいのではないかと思います。



次に二つ目の舞台は、横浜にぎわい座での上方落語でした。入場料は3000円。大阪の落語である上方落語を関東地方でみられる寄席、にぎわい座は横浜の次の駅、桜木町にありました。関西の落語は初めてだったのでドキドキしながら舞台を見ました。上方落語と江戸落語の違いはそれほどありませんでしたが、ただ話のネタに入る前の小話、すなわちまくらから違いが見られました。まくらは、観客を集中させるため、自分の話に耳を澄ませようとする落語の一つの形式です。普段、雑談をするように噺家本人の個人的な体験を社会的に話題になった話をしながら、観客とコミュニケーションをするように共感を導くまくらは、ネタに入る前に自然と笑いがこぼれる舞台の雰囲気を作ること大事な役割を果たしています。江戸落語の噺家のまくらは、爆笑より薄笑いを誘発させて、後の大ネタの前哨という感じがしました。しかし、上方落語の噺家は、まくらとネタがほぼ同じくらいの分量でなされ、噺家はネタよりむしろまくらに気合を入れて高座を演出している感じがしました。ネタ自体はあまり関西風という感じがしませんでした。まくらでは関西独特のイントネーションとしゃべり方、大きなジェスチャーと声などで本場の上方落語を楽しむことが出来ました。同じ落語だが、地域によって感じがかわるのを見て、ここからも関西のプライドというものを感ずることが出来ました。

次に三番目の舞台は、シアターサンモールでの「ハンサム落語」でした。新宿にあるこの劇場のチケットは3500円。予想できなかったこの舞台は、劇場の中の観客を見てすぐ予測できました。ハンサム落語という文字どおりにイケメンでモデルのような男性俳優が落語を披露する舞台でした。観客のほとんどが20代の女性であり、プロの噺家ではなく素人の落語にも観客たちは笑ったり泣いたり拍手を惜しみませんでした。四人の役者が二人ずつチームを組んで、着物を着て落語の高座に座り、前に置いた台本を読みます。もちろん、感情をこめて台本を読みます。最初は、ちょっと腹が立ちました。女の子ばかりの客席で男は少ないし、レベルが低いともいえる舞台にお金を払ったのがも

ったいなく感じられました。しかし、舞台が終わった後、役者 4 人の感想を聞くことができました。このハンサム落語は、主に年配の人たちを対象とする落語という文化をより様々な年齢層に紹介しようとする趣旨から始まった形だと言いました。それを聞いていたら、僕も納得がいき、うなずくことが出来ました。確かに専門的な落語ではありませんでしたが、こういう風にいろいろな方法で日本の文化を紹介しようとしている彼らの努力に感心しました。



次に四番目の舞台は、下北沢駅前劇場での「フレネミーがころんだ」というコメディーでした。日本の演劇のメッカ下北沢は、韓国の大学路にあたる場所です。劇場もほとんど小劇場で、街中に演劇の小道具を売る商店やリハーサルが出来るスタジオがいっぱいありました。下北沢駅前劇場もとても小さい劇場で、客席は 100 席にも満たないほどでした。チケットは 3500 円。薄汚くてたばこのにおいがしみついた劇場に入った時は、期待する気持ちがおこりませんでした。しかし、舞台が始まってからは素晴らしいお芝居にすいこまれて、1 時間 30 分の間息を殺して鑑賞しました。限定された場所で短い期間をアツかったこの演劇は、料理教室のオーナーとスタッフ、それから講師たちと生徒たちとの関係から生じるハプニングを面白おかしく描いた喜劇でした。僕と同じくらいの年齢層の俳優さんたちの芝居を観ながら、とても刺激を受けることが出来ました。10 人上もいる配役の個性をうまく調和させた脚本も素晴らしかったです。この先、日本語での演劇に挑戦するチャンスがあったらぜひチャレンジしてみたい作品でした。

次に五番目の舞台は亀有駅での柳家喬太郎・三三二人会でした。この舞台は、柳家の真打である二人が二回ずつ高座に上がる二時間ほどの落語会でした。日本の最高レベルの噺家の舞台らしく、劇場も大きなホールで入場料も 3500 円しました。全部で 5 席の落語でしたが、最初の舞台は柳家前座レベルの若手の噺家で、短い古典落語を披露して客席の雰囲気をもりあげました。続いて大真打レベルの柳家喬太郎という噺家が出てきて、上品な古典落語を披露しました。次に柳家三三という若手の真打が出てきて「三枚起請」というすこぶる有名な演目を披露しました。以前にも三枚起請を聞いたことがあったからか、僕にはちょっと退屈に聞こえました。次に 15 分の休憩をはさんで柳家三三が「加賀の千代」という演目を披露、最後に柳家喬太郎が登場し、現代のセールスマンの話を披露しましたが、今まで見てきたどんな落語より集中できる話だったと思います。古典からモダンの新作落語までその名声にふさわしいすばらしい舞台だったと思います。



次に六番目の舞台は渋谷にあるパルコ劇場での「ホロヴィッツとの対話」という喜劇でした。日本を代表するシナリオライター三谷幸喜の新作の入場料は何と 9800 円。パルコビルの最上階にあるこの劇場は、以前に何度も三谷幸喜の舞台が上演されたことがあります。この舞台の登場人物はたったの 4 人。天才ピアニストホロヴィッツとその妻、そして彼のピアノ調律師とその妻が披露する 130 分間のユーモラスな喜劇でした。ここでピアノ調律師として登場する役者渡辺謙は、世界的に有名な俳優でもはやハリウッド映画にも進出したスターです。舞台はピアノ調律師の家、ホロヴィッツの家という二つの場所に設定され、ここで一晩の間に起こった出来事を描いています。他の演劇と異なる点は、舞台の後ろの方に本物のピアニストがライブで BGM を演奏してくれる点です。面白かったのは、舞台の裏にいるピアニストが時々舞台の役者との絡みを持つ部分です。例えば、役者が「ピアノの音がうるさい」というと裏にいるピアニストがピアノの音を小さくします。今回の旅のハイライトともいえるこの演劇は、期待以上の作品で二時間の間とても幸せでした。

次に七番目の舞台は新宿紀伊国屋書店本店にある紀伊国屋ホールでの演劇、「熱海殺人事件」でした。チケットは 5000 円。今度の旅で二番目に値段が高いこの演劇は、日本の伝説的な劇作家つかこうへいが 40 年前に描いた作品をアニバーサリーで新しくアレンジした舞台でした。登場人物は、部長刑事と婦人警官、そして部下の刑事と犯人の 4 人です。ダンスグループ EXILE の NAOKI が犯人役と聞き、期待はしませんでした。予想とは異なり素晴らしい芝居をしてくれて驚きました。とんでもないセリフとスピードでとてもついて行くのが大変でしたが、若い役者たちのエネルギーと努力で二時間の間、感心しながら鑑賞しました。40 年前のこの作品の内容は知りませんが、僕が今回観た熱海殺人事件では、最近の情緒と社会的な 이슈を舞台に込めて観客の笑いと共感を引き出すことに成功しました。ちょっと行きすぎた設定で原作とかけはなれてしまったような感がありましたが、時々、舞台に集中するのを妨げるいくつかの危険要素がありましたが、若さというエネルギーでやり遂げ、最後には盛大な拍手をもらっていました。舞台が終わった後、私は原作を読みたいと思いました。



次に八番目の舞台は、神保町駅にある神保町花月での新喜劇「謎と答」という軽演劇でした。入場料は 2000 円。まず、軽演劇と言うのは、演劇の種類の一つでコントやシチュエーションコメディーみたいにオリジナル演劇とは少し異なるジャンルの演劇です。新喜劇は、軽演劇の一 종류で、深刻な物語の中にショートコントがちりばめられている演劇で、吉本興業所属の芸人たちがアレンジした新しい形の喜劇です。役者は 10 人で全員吉本興業の芸人たちでした。普段漫才などの形で活躍する芸人さんが直接脚本を書き、演出や演技もしていたので、内容自体に期待はしていませんでした。しかし、隙のないシチュエーションとセリフ、動きで観客を驚かせ、時々ちりばめられた笑いの要素は決して演劇の邪魔になることはありませんでした。適切なタイミングで笑いを見せて観客の爆笑を誘っていました。今まで見た舞台の中で一番笑うことのできた作品でした。舞台が終わった後は抽選で CD や DVD を配るなど観客と直接コミュニケーションをすることを目指した素晴らしい舞台だと思いました。

次に九番目の舞台は、神保町駅そばの落語カフェでの講談会でした。入場料は 1500 円。共立財団のソウル事務所よりも小さいスペースで行われたこの講談会は、噺家が上がる高座も他の寄席の何倍も小さいものでした。客席も 30 席ほどで、トイレなどの施設も便利とは程遠かったです。しかしいつもどおりに噺家の腕は全く僕を絶望させることはありませんでした。演劇を観たあとにすぐの講談会であったので、疲れは感じていましたが、汗をかきながら上演する噺家の情熱に大変感心し、疲れも感じずに観ることが出来ました。僕が思っていた落語とは異なり、講談はまさにストーリーテリングでした。宮本武蔵、忠臣蔵など歴史上の人物の有名な逸話を落語で披露しました。3 時間という間に五つの高座がありましたが、その中の 4 回は、同一の噺家によるもので、途中の休憩の前には客員として別の噺家が高座に上がって普通の古典落語を披露しました。5 回の高座のすべてが興味深いストーリーでしたが、3 時間の舞台は観客たちをつかれさせるのではないかと心配になりました。しかし、センスで音を出しながら場面を変えて演じる講談の話し方は、とても斬新な感じがし、いい勉強になったと思います。



最後に十番目の舞台は、上野ストアハウスでの喜劇「笑う通訳」でした。チケットは2800円。この演劇は、4番目の舞台、フレネミーがころんだと似たような感じで、通訳士に関する内容でした。登場人物は10人で、すべてが専門の役者で、個人的な芝居はとても良かったです。しかし、出演者がそれぞれ異なる劇団出身、つまり客演の役者が多かったのも、一つのチームとしてのハーモニーはなかったと思います。しかし、脚本と演出はとても素晴らしかったです。一日の間に起きた事件を二つの目線から見て、表現していました。左右対称の舞台を作り、暗転とともに役者たちの配置をそれぞれ変えて、アングルの変化を演出していました。人間というものは、自分が聞きたいことだけを聞きたいように聞くというメッセージを表現するブラックコメディ的な要素があって、もう一度考えさせられる教訓のある演劇でした。ただし、役者たちがこの脚本を100%表現するには多少力量不足ではないかと思い、場内も少し散漫とした感じで演劇に集中するのが難しかったです。後で分かったことですが、この舞台はDVDにもなっているそうです。DVDを手に入れることが出来たら、オリジナルの劇団員による舞台を観てみたいです。



以上は 10 本の舞台に関する僕の感想です。韓国と日本の演劇人の個人的な能力の差はそんなにないと思います。ただ、僕がここ日本で感じた違いは、その実力を思う存分発揮できる環境の違いでした。韓国では今現在、全国的に数多くの舞台が存在するようになりました。数多くの舞台を作るのも重要ですが、いい環境の上での舞台がもっと必要だと思います。日本のように最適化された環境を作り、より効果的な舞台を作ることを目指すべきだと思います。これは、舞台施設といった技術的な問題ではなく、演劇をする人々の考え方の違いだと思います。卒業後、韓国の演劇界で日本で感じ、学んだ情趣とノウハウを上手に適応したいと思います。

昼伝夜光の旅

～ 昼はTradition! 夜はIllumination! ～

淑明女子大学 日本学科 キム・ジンソン

「昼伝夜光」という四文字から何が想像されますか。「昼耕夜読」とは「昼間は耕し夜は読書に励むこと」を意味する諺です。そして「昼伝夜光」とは「昼間は日本の伝統文化を体験し、夜はイルミネーション名所を巡る」という意味で私が企画した旅行のタイトルです。

私は第15回日本体験コンテストを通じて9泊10日間、東京と静岡、名古屋、関西地方、九州地方を旅行し、昼間は様々な日本の伝統文化を、夜は綺麗なイルミネーションを体験しました。日本は伝統文化が立派に継承されている国として有名です。また、毎年冬になると日本各地で行われるイルミネーションのイベントはその数と規模が韓国とは比べ物にならないくらいです。このような日本の伝統文化とイルミネーションを両方とも満喫できる昼伝夜光の旅は昼夜共に充実した素晴らしい旅行だと思います。

1. Tradition

今回の旅行で私が体験した日本の伝統文化は、着物、浮世絵、町家、和楽器、茶道、会席料理、初詣、博多織の八つです。

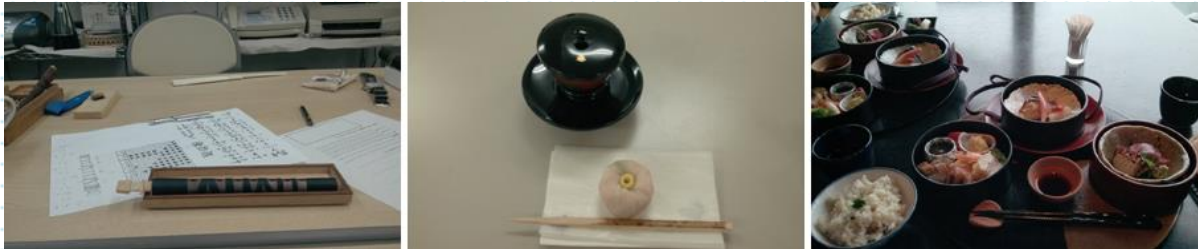
まず着物の着付けは東京のある着物教室で体験することができました。着物といえば花柄の派手なデザインが真先に思い浮かびますが、私が着た「江戸小紋」という着物は少し地味に感じるほどのシンプルなデザインが印象的でした。名前からも分かるように小さな紋様が細密に飾られているところが江戸小紋の特徴です。着付けの体験ができた上に着物に関する様々な話も聞くことができとても有意義な時間でした。

大阪の「上方浮世絵館」では「上方浮世絵の中の京都」という展示を見学しました。上方浮世絵の特徴は主にその当時活躍していた歌舞伎俳優の姿を描いているというところです。浮世絵を実際に見るのは初めてでしたが、表情や仕草、衣装などが繊細に表現されていて面白かったです。

そして京都の町家見学は今回の旅行で体験した伝統文化の中で一番満足度の高い体験でした。長い歴史を持つ町家の隅々を親切な説明と共に見学していたらなんだか癒されるような気持ちになりました。私が見学をしたときは年末年始ということで鏡餅や神棚などが飾られていましたが、季節によってそのような内部の飾りは変わっていくそうです。

町家と同じくらい印象深かったのは名古屋の和楽器スクールで体験した箏箏でした。授業は和楽器についての説明から始まりました。そして楽器を触る前にまず口で音を出してみる練習をしました。元々は一年以上この練習を続けてからでないと楽器を手を持つことは不可能だそうです。箏箏の演奏は思ったよりも難しく大変でしたが、音を出せるようになったときは本当に嬉しかったです。機会があればもう一度きちんと習ってみたい魅力的な楽器でした。

お茶に対する日本人の丁寧な気持ちを感じることができた茶道、季節感の溢れるお料理を目と口で味わった会席料理、日本の正月の風景を楽しむことができた初詣、博多のある博物館で直接体験してみた博多織まで、日本の伝統文化体験は日本学を専攻している私にとって貴重な経験でした。ある国を勉強するにあたってその国の伝統を知ることがどれだけ大きな意味を持つのかを改めて考えさせられました。



2. I l l u m i n a t i o n

今回の旅行で私は全部で11ヶ所のイルミネーション名所を巡りました。

まずクリスマスの日に行ったカレッター汐留と六本木ミッドタウンのイルミネーションはものすごい人混みで大変でしたが、長い待ち時間が勿体無くないほど綺麗でした。イルミネーションと共に過ごす東京のクリスマスはロマンチックそのものでした。

静岡の時之栖イルミネーションでは色とりどりのイルミネーションで出来たトンネルが印象的でした。キラキラと輝くトンネルの中を歩いていたらまるで違う次元の世界に来たような不思議な気持ちになりました。トンネルの中には青森のねぶたも飾られていて楽しさ満載でした。

大阪では御堂筋となんばパークス、大阪駅のイルミネーションを楽しみました。特に「光のルネサンス」の一環で行われている御堂筋イルミネーションは地下鉄淀屋橋駅から心斎橋駅まで一直線で繋がった道を全て綺麗に飾っていて、短くない距離なのにも関わらずあっという間に最後のところまで辿り着いてビックリしました。

名古屋駅から簡単に行ける三重県のなばなの里では今回の旅行で一番記憶に残るイルミネーションを見ることができました。今年のなばなの里のイルミネーションのテーマは「大自然」でした。太陽が昇る風景、星が光る風景、雨粒が落ちる風景、富士山や海の中の風景など、大自然をそのまま描いているイルミネーションショーがとても幻想的でした。単純なイルミネーションではなく、感動を与える一つの作品のようでした。

ヤフージャパンが発表したベストイルミネーション1位に輝くハウステンボスのイルミネーションもとても綺麗でした。とても大規模なイルミネーションでどこを見てもキラキラと眩しかったです。イルミネーション好きなら必ず一度は行ってみるべきイルミネーション名所だと思います。

その他にも九州地方では小倉駅、博多駅、天神駅付近のイルミネーションも印象深かったです。テーマパークやショッピングモールではなく、日常生活で誰でも通り過ぎる駅の近くにイルミネーションが飾られているとい

うところがとても良かったです。韓国でもこのように様々なイルミネーションのイベントが行われたらいいなと思いました。



今回の昼伝夜光の旅を通じて私は日本の伝統文化、つまり日本の「過去」を、そして日本のイルミネーション、つまりずっと発展し続けてきた日本の「現在」を体験することができました。そしてその中で新たに感じた日本という国の魅力、それが日本の「未来」であるのではないかと思います。

9泊10日間の日本旅行は私にたくさんの思い出と感動を残してくれました。このような素敵な機会を与えてくださった共立国際小学財団の方々に心から感謝の気持ちを伝えたいです。